

出会い、この生命のいぶき

湯川 すが

関東通信病院産婦人科病棟主任婦長

関山さんに紹介頂きました湯川です。

私は大学病院と現在勤務している関東通信病院と、合わせて20年間助産婦を続け、今は産婦人科病棟の主任婦長をしております。昨年度、日本看護協会・看護研修センター(管理コース)を卒業し、元の病棟に帰ってきたほやほやです。

今回、病棟に帰ってきて、助産婦学校に入学する看護婦と話をすることがありました。

若い看護婦との出会い

1年間産婦人科病棟の勤務をしたその看護婦は、自分の人生のなかで大きな経験をしたと語ってくれました。それは同じ病棟のなかで、数分の間に、生命の誕生と終末の場に関わったということでした。その看護婦は、何もできずただぼう然としていたと話してくれましたが、そのぼう然としていたことが何を意味するのか今もまだ分からないと言っていました。

喜びと悲しみを同じ病棟のなかに置くべきではないという考え方もあります。またスタッフはどのような関わりをすればいいのか分からないともいいます。今まで私は、それらの考えから目をそらしてきました。そのため看護婦からこの体験を聞いたとき適切なアドバイスができなかったのだと思います。けれども、人生であまりにも大きな出来事が2つ重なって起こったためにその場に適應した行動がとれなかった看護婦に、私が答えられた言葉は、一言、あなたのその時の感情を忘れないようにということでした。

ガンの患者さんとの出会い

産婦人科病棟は人生の出発の場であると同時に

に、近年はガンの患者さんも増え、その方たちの終末を迎える場所にもなるのです。

産婦人科病棟で主に助産婦業務をしてきた私は、死に遭遇することはあまりありませんでした。

けれども、その私に、ある時、1人のガン末期の患者さんとの出会いがあったのです。

助産婦である私は死を目前に苦悩しているこの患者さんと接し、患者さんから逃げようとする自分と、それを否定しようとしているもう一人の自分との対立にとまどっていました。つまり、どのような看護をしたらいいのか、何かあるはずだという気持ちと、関わりと自分がつらい思いをするから逃げたいという気持ちとの対立です。

リーダーである私がこのような気持ちで悩んでいるとき、スタッフは一生懸命その患者さんに関わっていました。痩せて骨だけになった患者さんに、食欲が増すから一緒に紅茶を飲んでほしいと頼まれると、夜中でも一緒に飲んでいたのでした。

その患者さんは病気になったことを悔い、愚痴を言っては私たちを困らせていたのですが、ある時、自分のできることは自分でやってみると言い、一生懸命やりはじめたのです。その時はそれを深く考えることができませんでしたが、今になって、あの時患者さんはカール・ロジャーズの『人間論』にあるように、病気を受容し、そこから生きようとしていたのだということが分かりました。

その患者さんは亡くなられる2日前までは自分でベッドから降り、お小水もしました。

それまで助産業務だけに関わってきた私は人が死ぬことについて深く考えることもありませんでした。しかしこの患者さんが亡くなられてから少しずつ考えるようになりました。



自己との出会い

私は、心の中の言語化できないいらだちを深く追求してみたい、また私にはできなかったスタッフのあの時の行動は何なのか知りたいと思ったのです。いままで何を考えて助産婦をしてきたのか、それをも改めて振り返ってみたくくなりました。

そして、看護部長にその思いを話し、1年間の管理コースに行かせていただくことになったのです。

今日まで自分がやってきた助産婦、看護婦の役割について、1年間自分をみつめ考えてみました。

その結果得たことは、よりよく生きようとする人を支えるには、自己をみつめなければならないということ、また自己をみつめ成長しようとすることは他者との関わりを通したなかでなければできないということです。

私は患者さんから逃げようとする自分と、その自分に反発し逃げられない自分との対立は何なのかと考えるうちに、ガン末期の患者さんから主体的に生きようとする生命力を学ぶ一方で、死を恐れていた自己を発見したのです。

いままで私は、人と人との関わりを少し軽く考えていたようです。あの患者さんから、またスタッフから私が得たことは自分の人生で大きなインパクトとなりました。人間は人間との関わりを通じてお互いに成長していくのだということを実感させられ、これが看護の本質だということが私の学びとなったのです。

私は命の尊さをいつも語ってきたのに、それは単に受け売りの言葉だったということにも気づきました。

いのちとの出会い

私は学友と触れ合い、お互いの精神的な葛藤で苦しみ、それぞれの悩みを解決しようとしながら看護を追求し合うなかで、いのちの尊さが分かり始めました。つまり認めてほしいと思う自分を発見し、それは相手も認めなければならないことにつながると気づき、相手の存在を認識し、それがいのちの尊厳に結びついていったのです。

あのガン末期の患者さんに会わなかったなら、このような考えにたどりつかなかったと思います。また助産婦としても、生命の誕生に表面的な関わりだけですごしていただろうとも思います。

今、私は再び産婦人科病棟に帰り、毎日分娩に関わり、またガンの患者さんとも接しています。

新生児との出会いではいのちのすばらしさに涙ぐみ、一方化学療法に耐えているガン患者さんにいのちの力強さを感じ、その人なりに最大の生命力が働くよう、私は私の役割を果たしています。いろいろな患者さんや産婦さん、またスタッフとの出会いに感謝しています。人がその人らしく、よりよく生きていくよう、自分にもその言葉を向け、誇りをもってこの仕事を続けていきたいと思っています。

これからも人との出会い、いのちとの出会いに感謝し、大切にしていきたいと思っています。

* * *

今回は今回の研修で知り合って意気投合した原田幸子さんをご紹介します。原田さんは奈良県立三室病院の産科の婦長をされており、母子保健について語らせたら一晩でもOKというぐらい前向きな方です。